

『先達の『言葉の処方箋』 ～ 思いを超えて進展する ～』

2023年2月1日テレビ関係の取材を受けた。筆者が、癌研究会癌研究所時代の恩師：菅野晴夫(1925-2016)先生から学んだ【『吉田富三(1903-1973)は、1)顕微鏡を考える道具に使った最初の思想家 2)顕微鏡でみた癌細胞の映像に裏打ちされた『哲学』 3)「がん細胞で起こることは人間社会でも起こる」】をさりげなく語った。さらに、【菅野晴夫先生は、南原繁(1889-1974)が東大総長時代の東大医学部の学生であり、菅野晴夫先生から、南原繁の風貌、人となりを直接うかがうことが出来た。そして、菅野晴夫先生の恩師で、元癌研所長で東大教授であった日本国の誇る病理学者：吉田富三との出会いに繋がった。菅野晴夫先生の下で、2003年『吉田富三生誕100周年記念事業』を行う機会が与えられた。こうして南原繁、吉田富三との出会いから必然的に『がん哲学』の提唱へと導かれた。さらに『陣営の外＝がん哲学外来』へと展開した。『がん哲学』とは、南原繁の『政治哲学』と、吉田富三の『がん学』をドッキングさせたもので、『がん哲学＝生物学の法則＋人間学の法則』である。『がん哲学外来』は、生きることの根源的な意味を考えようとする患者と、がん細胞の発生と成長に哲学的な意味を見出そうとする病理学者の出会いの場でもある。『がん哲学外来』で語るのは、先達の言葉である。まさに『言葉の処方箋』である。】と紹介した。

吉田富三を生んだ福島県の福島県立医科大学で、2009年『吉田富三記念福島がん哲学外来』が開設された。『医師の3ヶ条：医師は生涯書生・医師は社会の優越者ではない・医業には自己犠牲が伴う』（吉田富三）は、まさに、現代にも生きる。さらに、【「医師が患者という人間をみる『眼』の問題は、近代医学教育と、医師の修練過程のどの部分で、どれだけ重視されているのか。そこを考えると、疑問なきを得ない。」】（1967年）とも記述している。2023年2月2日は、新渡戸稲造記念センターに赴く。院内ニュース第23-03号に下記が案内されていた。

新渡戸稲造記念センターの移動について

新渡戸稲造記念センターは2023年2月1日より、本館6階から東京医療別館3階へ移動いたしましたので、お知らせいたします。

皆様の心温まる対応には、ただただ感謝である。『ビジョン』は人知・思いを超えて進展することを痛感する日々である。